

滋賀県高島市方言

逸民 誠

項目		基本情報
話者 情報	生年	1940年
	生育地	滋賀県高島郡西庄村（現高島市マキノ町）
	性別	男性
	補足情報	両親とも同じ地域の出身。20代の頃、冬の農閑期に京都などへの出稼ぎ経験あり。
解説	概要	滋賀県の方言は、京都方言との共通性が高い湖南方言（甲賀地方を別区画とすることも多い）と、近畿・中部の接触地帯である湖北方言、そしてその中間的な湖西方言と湖東方言に大分され、高島市は湖西方言域に位置する。京阪式アクセント、ウ音便、断定ヤ、条件-タラなど京都方言と共通する点が多いが、湖西方言の特色としてシエ・ジエ音の残存、待遇形式-ンス、文末詞ノーなどが挙げられる。福井県に隣接する地域で、話者は「この方言は関西弁と福井弁が混ざっている」との言語意識を有す。今回の方言訳にあたっては、伝統的な形式を意識しつつ、近所の同世代との心安い会話を想定している。
	表記	カタカナ音声表記とした。セ・ゼがシエ・ジエに近い音で発音されることがあるが（例文36の「1000円」など）、表記に当たってはセ・ゼに統一した。
	文法概説	<ul style="list-style-type: none"> ・格助詞オ・ガ・ニや係助詞ワの省略が盛ん。引用のトについては、方言訳ではトモチ【例文4備考】やチュートッタ【例文42】のような融合形式が現れるが、省略も可。 ・理由の接続助詞はサケ（外部の人との会話ではサカイも使用）、逆接の接続助詞はケンドやノニ。 ・疑問の終助詞はカで、ケは不使用（話者によると、マキノ町でも地域や世代によっては使用）。 ・否定は-ンで、-ヘンや-ヒンは不使用（話者によると、マキノ町でも地域や世代によっては使用。話者は中学時代に初めて触れた形式とのこと）。否定過去は-ナンダ。 ・継続は-テル、-ト（ー）ル（下向き）、-タール（無生物）を使用。-ヨ（ー）ルに進行や習慣の用法はなし。 ・待遇形式は同輩以下の第三者への-ヨ（ー）ルの使用が顕著。ヨンミョール【例文7】やカッキョル【例文20】のようによく拗音化する。 ・今回の方言訳には登場しないが、目上への軽い尊敬語として-ンスがあり、第三者待遇でも対者待遇でも使用（五段動詞では未然形に後接、その他動詞では連用形にヤを介して後接。テ形に後接すると、-テと融合して-タンスとなる。否定-ンセン、過去-ンサ、命令-ンセ。湖北方言と違って目下には不使用）。-ノルについては、この話者にとっては「京ことば」という意識が強く、主に外部の人との会話で使用する形式とのこと。 ・ノマイサ【例文16】のような特殊なサ行イ音便が起こることがある。 ・今回の方言訳ではノダ形はノヤのみ登場するが、話者によるとニヤもよく使用すること。

〔基本例文50〕 滋賀県高島市方言訳

方言訳1 (もっともよく使う表現)	方言訳2 (使うこともある表現)	備考・コメント
1 コレカラ トモダチニ テガミ カイテ ダシタロー。		「これから友達に手紙を書いて出してやろう」
2 フデデ テガミ カクヨナ ヒトガ イル ノヤナー。		「筆で手紙を書くような人がいるのだなあ」
3 イエ インデカラ スグ テガミ カイタ ワ。		
4 テガミ カイタケンド ドッカ ウカシナ トコガ ナイカト オモテ ナンベンモ ミナオシタ。		「手紙を書いたけれど、どこかおかしなところがないかと思って、何度も見直した」。トオモテは、トモテとも言う。
5 バンワ オソーマデ オキデント ジュー ジマデニ ネナ アカン。		「晩は遅くまで起きていないで、10時までには寝なければいけない」。強い命令ではネーのような形式も使用。ネ口は不使用。
6 アブナイサケ クルマノ ハシル トコ アルイタラ アカンゾ。	コラー ソンナ クルマノ トール トコ アルクナー。	訳1「危ないから、車の走るところを歩いてはいけないぞ」。訳2はやんちゃ坊をきつく叱る形式。女性語ではアルクナヤ。
7 コノ ホン タローニ ヤルト ヨン ミョールヤロカノー。		「この本を太郎にやると、読むだろうかねえ」。ヨンミョールはヨミヨールの変形。
8 ヒルカラワ アメフリニ ナルヤロノー。		「昼からは雨降りになるだろうねえ」
9 サムデモ ハルニ ナツタラ ハナ サイ テキタノー。		「寒くても春になったら花が咲いてきたねえ」
10 ハナコガ マド アケヨッタサケ ムシ ハイッテキヨッタガナ。		「花子が窓を開けたから、虫が入ってきたじゃないか」
11 アサマワ アンマリ テレビ ミンノー。		アサマは「朝間」のこと。
12 ハナコワ ソンナ バングミテナモン ミ ヨランワ。		テナモン「なんてもの」
13 ハナコ キンノワ テレビ ミヨラナダ ノー。		
14 ハナコワ テレビ ミント ホン パッカ リ ヨンドル。		
15 テレビサエ ミナンダラ コンナ シゴト キョージュニ デケタノニ。		「テレビさえ見なければ、こんな仕事、今日中にできたのに」
16 コドモニ ネット デタサケ シヤナイ ク スリ ノマイサワ。		「子供に熱が出たから、仕方がない、薬を飲ませたよ」。ノマイサはノマシタの特殊なイ音便形。
17 イモートガ オカーニ ヨー イーツケラ レテ ドッカ イキヨッタ。		「妹が母に用を言いつけられてどこかへ行った」
18 オトートト ケンカシタラ ウチダケ オ ドツタンニ オコラレタ。		オドツタンは通用範囲の狭い俚言で、笑われないよう小学校では口にしないようにしていた。なお、祖父のことはオンジャン、祖母のことはオバと言った。
19 ルスノ アイダニ ドロボーニ ヤラレテ モタ。		「留守の間に泥棒にやられてしまった」
20 コイツ マダ チサイノニ ムツカシ カ ンジ カッキョルノヤ。		「こいつはまだ小さいのに、難しい漢字を書くのだ」。カッキョルはカキヨルの変形。

21	キヨーワ マガ アルサケ ユックリ テ ガミ カケルワイ。		
22	コイツ マダ チーサイサケ ヒラガナシ カ マダ カケン。		
23	ツクエ ナイサケ ツクエノ ウエデ ナ イト ウマイコト ジーガ カケンワ。		「机がないから、机の上じゃないと、 うまいこと字が書けないよ」
24	タローワ ソコノ マーデ イマ ホン ヨンドールノヤロー。		「太郎はそこの間で今、本を読んでいる のだろう」
25	ハナコカラ カリタ ホン ハイカラ ミ ナ タロー ヨンデシマイヨッタ。		「花子から借りた本を、早くも皆、太 郎は読んでしまった」。カリタはカッ タとも言う。
26	モット シーント シタ トコデ ネットイ ノー。		
27	ユーヤケデ アッチノ ソラ マッカヤ。		「夕焼けであっちの空が真っ赤だ」
28	チサイ トキワ ヒトリデ センチ イク ノ オトロシカッタ。		
29	うどんカ ソバヤト ヤスイヤロニノー。		「うどんかそばだと安いだろうにね え」
30	フルホンヤガ オモイモセナダ タカイ ネーデ コーテクレタワ。		「古本屋が思いもなかった高い値で 買ってくれたよ」
31	コノ ワルゲシキデ ダーレモ コンワ。		コノ ワルゲシキデ「この悪景色で」
32	モット ヤスカッタラ カエタノヤケン ド。		
33	ヒトリダケデ アソビニ イッテモ オモ シロナイワイ。		イッテモは、イツカテとも言う。
34	テンキ ヨーナッタラ デラレルワイ。		
35	マダ タローワ チューガクセーヤ。		
36	ワシノ チサイ トキ センエンテナモン ワ ゼンゼン テニ デケナダ。		「私の小さい時、1000円なんてものは 全然手にできなかった」
37	コレガ ヌスットノ アシアトカモ シレ ンノー。		「これが泥棒の足跡かもしれないね え」
38	ソラ ワシノ カサヤ。 アッチノガ セ ンセーノ カサヤ。		
39	モシモ アシタ テンキ ヨカッタラ コ ドモラ ツレテ ドッカ イコカ。		
40	コノ カサト クツワ ワシノト チガ ウ。		
41	A : アシタモ ココニ クルカ？ B : ウン モーイッペン キテミヨカ。		モーイッペン キテミヨカ「もう一度 来てみようか」
42	A : ナンデ コンノヤ。 クル チュー トッタノニ。 B : スマン。 カラダガ グアイガ チョット ワルテ アカンノヤ。		

43	A : アッコニ イヨールノ タローヤロカ? B : イヤ タロート チガウ。 ジロートチガウカ?		この話者は、チャウという形式は不使用。
44	A : ドレガ オメーノ カサヤ? B : コレガ ワシノ カサヤ。	A : ドレガ アンタノ カサヤ? B : コレガ ウチノ カサヤ。	訳1は男性語、訳2は女性語。
45	A : コノ ホン ヨムノヤッタラ カシタルヨ。 B : ソノ ホンヤト モー ヨンデシモタール。		ヨンデシモタール「読んでしまっている」
46	A : トナリノ イエニ ドロボー ハイヨッタノヤテ。 B : エ、ホンマカ。 ホット ウチモキー ツケント アカンナー。		ホット「そうすると」
47	A : アメ フリソーヤサケ マドー シメトイテクレ。 B : モー シメタールヨ。		
48	A : ソバ クイニ イコカ。 B : ソバヨリ ウドンノ ホガ ヨイワ。		
49	A : イロハショテン チュー ホンヤ ドコニ アルカ シランカ? シッテルカ? B : シッテル。 ホラ アッコニ カンバンガ ミエテルヤロナ。		
50	A : ハルノ サンサイノ タラノメー フキノトーヤ カンゾーヤラ ウドヤラ クタ コト アルカ? B : ウン。 タマニ モロテ クタ コト アルケンド フリト ウマカッター。		B : 「うん。 たまに貰って食べたことがあるけれど、わりとうまかったねえ」